

【選評】

法政大学教授

高橋和宏



絡み合う組織間の利害 「成功物語」の表裏を描く

「米軍基地問題」という文字を目にすると、どうしてもすぐに沖縄のことを連想してしまう。だが、時代を少しさかのぼると、本土にも多くの米軍基地問題が存在した。一九五〇年代には東京都立川での砂川闘争や石川県の内

灘闘争など、米軍基地の拡張に反対する運動が各地で展開されたし、六八年の原子力空母エンタープライズの佐世保入港は、日本国民の反核感情やベトナム反戦感情と結びつき、大きなうねりとなった。

基地の消長 1968-1973

日本本土の米軍基地「撤退」政策

川名晋史・著

勁草書房／2020年6月／3500円＋税

この状況を変えたのが、一九七〇年代前半に実施された都市部（東京、神奈川、福岡）を中心とする米軍基地の整理・縮小だった。立川飛行場や板付飛行場が返還され、米軍住宅施設が市民の公園へと姿を変えた。ほかにも少なくない米軍基地が自衛隊との共同使用となり、星条旗と日の丸が並んで掲揚されるようになった。こうして、多くの国民の視界から米軍の存在は遠ざかり、本土の米軍基地問題は「解消」していった。

この日本本土からの米軍基地「撤退」政策は、なぜ、どのように決定したのか。本書は、七〇年代前半の在日米軍基地の撤退をめぐる米国政府内の複雑な政策決定プロセスを、米側一次史料と理論的な分析枠組を用いて、因数分解するように明快に描き出している。

米軍基地をめぐる政策決定過程という、合理的なアクターが安全保障戦

略に従って最適解を導き出すような理路整然としたプロセスを想像する。だが、それがイメージにすぎないことが本書を読むとよくわかる。

基地政策は安全保障戦略のみならず、国防費の効率的な活用を求める予算上の制約や日本国内の米軍基地への反発（政治的受容性の低下）への配慮といった要因にも左右されたし、米軍の組織防衛反応によっても振幅をみせた。また、一枚岩の強固な組織のようにみえる米軍も、内部には文官がグローバルな視点から基地の合理化を考える国防長官府と、政治的配慮よりも軍事的観点を重視する制服組との対立があり、とりわけアジア太平洋地域を所掌する太平洋軍は、地域安全保障を強調して基地削減を求める国防長官府の方針に抵抗した。

基地の既得権にこだわる米政府に対し、予算削減の観点から切り込んだ連

邦議会の役割も印象的である。ベトナム戦争が泥沼化するなか、海外での米軍の活動を調査するために上院に設置されたサイミントン委員会は、政府には海外基地を削減、撤収しようとする自発的な動機は存在しないと喝破し、日本国民の反基地感情にも配慮して、関東平野の基地削減を求めた。

一九六八年の日本国内の反基地運動をきっかけに始まった在日米軍基地の見直しは、こうした多元的で多層的かつ長期にわたる連続的な政策決定の末に、ジョンソン・マケイン計画、整理・統合計画、関東計画として確定していった。

「撤退」のしわ寄せは沖縄へ

その「成功物語」の裏側で、撤退した米軍の収納先となったのが、本土復帰を迎えようとしていた沖縄だった。その理由は、移転先を本土から近から

ず遠からずの位置にある沖縄とすることで、米軍撤退によって生じた日本側の「見捨てられる不安」を宥める効果に期待したためだった。本土での米軍基地の整理・縮小のしわ寄せが沖縄に及んだこと、そして、本土の人間が現在もその状況に安住していることを改めて認識させられる。

本書が対象とした時期、日本政府が米国の基地政策に与えた影響力は限定的だったという。それは現在もそうかもしれないし、同盟関係の強化によって関与できる余地が増えたかもしれない。いずれにせよ、米国の基地政策決定というブラックボックスを解き明かした本書は、一九七〇年代以降積み残されてきた沖縄の米軍基地問題を考えるうえでも、数多くの手掛かりを提供している。研究者のみならず、日米同盟を支える実務家にも広く手に取ってほしい一冊である。●